

# 研究奨励交付金（COC研究） 報 告 書

令和3年度採択分  
令和4年5月31日作成

研究課題名（和文）「筑豊の子供を守る会」関係資料集成の刊行に向けて  
研究課題名（英文）Toward the Publication of a Collection of Materials Related to “The Association for Protecting Children in Chikuho”

## 研究代表者

氏 名 細井 勇  
福岡県立大学 人間社会学部・特任教授

## 研究組織

氏 名	所属研究機関・部局・職	役割分担（研究実施計画に対する分担事項）
鬼塚 香	人間社会学部准教授	資料収集、収録資料の選定、解説2の執筆等
堤圭史郎	人間社会学部准教授	編集方針への助言等
佐野麻由子	人間社会学部教授	編集方針への助言等
杉野寿子	人間社会学部教授	編集方針への助言等
陸 麗君	人間社会学部准教授	編集方針への助言等
細井 勇	人間社会学部特任教授	資料収集、収録資料の選定、解説1の執筆、関係者との交渉

## 研究奨励交付金（配分額）

30万円

### 研究成果の概要（当該研究期間のまとめ、できるだけ分かりやすく記述すること。）

これまでに収集され、現在附属図書館1階で保管されている、炭鉱閉山期の筑豊に関する資料を、「筑豊の子供を守る会」の関連資料を中心に再整理し、『「筑豊の子供を守る会」関係資料集成』として出版刊行するという2年計画の1年目であったが、刊行に向けた十分な準備ができた1年であった。資料の補充が実現し、収録する資料が確定し、編集方針も確定することができた。最終的に、全8巻、収録資料数240点となった。全体を編年順ではなく、以下大きく6項目に分け編集することにした。①筑豊の子供を守る会、②福吉炭住での活動、③鞍手地区での活動、④筑豊協力伝道奉仕会、⑤炭鉱犠牲者復権の塔、⑥県福祉事務所、の6項目である。

編者を本研究会のメンバー6人と資料提供いただいた7名による編集委員会編とすることを決定した。解説は細井が「本資料集成の概要について」を執筆し、鬼塚が「筑豊の子供を守る会の具体的な活動について」を執筆することにした。資料として「活動地一覧」を示すことにした。

## 研究分野／キーワード

筑豊、炭鉱閉山、キリスト教学生運動、生活保護、復権の塔

## 1. 研究開始当初の背景

筑豊に立地し、高度な福祉社会の実現を目指し、地域社会に貢献しようとする本学において、地域文化の遺産、記録と証言の収集には重要な意義があり、本学が取り組むのに相応しい研究活動の一つであろう。申請者の細井は、本学に長く奉職してきたことから、炭鉱閉山期における筑豊に関する種々の関係資料を提供いただいていた経緯がある。「筑豊の子供を守る会」についてまとめる構想を周囲の関係者に告げていたところ、「筑豊の子供を守る会」第4代委員長であった黒沼宏一氏（現在、静岡県在住）より、膨大な量の関係資料の寄贈を受けることになった。六花出版の山本氏と服部団次郎が創設した宮田教会を訪問し、牧村守元郎牧師から服部団次郎関係の資料を見せていただいたのが、筑豊に関する関係資料集の刊行にむけた動機となった。その後、福岡県職労で活動してきた城島泰伸氏からは、嘉穂福祉事務所の職員有志で刊行した『川筋』を入手することになり、本資料集の刊行に向けた全体像がしだいに見えてきた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、これまでに収集され、現在附属図書館1階で保管されている、炭鉱閉山期の筑豊に関する資料を、「筑豊の子供を守る会」の関連資料を中心に、再整理し、『「筑豊の子供を守る会」関係資料集成』（全8巻）として出版刊行することである。本書は、多くの研究協力者から寄せられた資料の復刻であることから、編者を「筑豊の子供を守る会」関係資料集成編集委員会（協力者を含む）とし、印刷・販売は六花出版に委託し、令和4年度（2022年度）に6月と11月の二期に分け刊行する計画である。

本研究は、本学が目指す、高度な福祉社会の実現に資する地域貢献につながり、筑豊・田川に立地する本学の責任の一端を果たすことになると考える。

## 3. 研究の方法

これまでに収集され、現在附属図書館1階で保管されている、炭鉱閉山期の筑豊に関する資料を、「筑豊の子供を守る会」の関連資料を中心に、再整理し、『「筑豊の子供を守る会」関係資料集成』として出版刊行することが目的である。このための方法ないし課題は以下の諸点であった。

1) 追加的な資料収集、2) 所蔵資料の目録化、3) 資料集成の全体構想の検討と確定、4) 収録資料の選定と目録化、5) 本資料集成の編集方針の確定、6) 解説の執筆、7) 研究会やシンポジウムの開催に向けた検討、などである。

1) について、「守る会」の創設者船戸良隆氏宅を訪問して追加的な資料収集を行うことを決定した。3) については、収録する資料の範囲を検討し、最終的には、「守る会」の関係資料の他に、服部団次郎（炭鉱犠牲者復権の塔）関係資料、服部清志関係資料、県福祉事務所関係資料を収録することに決定した。

## 4. 研究の主な成果

### (1) 研究活動の経緯と成果

令和3年8月に「筑豊の子供を守る会」関係資料の整理と目録化の作業に着手した。8月末 六花出版の山本、鬼塚、細井で福岡市社家町教会の牧村元太郎牧師宅を訪問し、服部団次郎関係の資料を収集した。その後、収録資料の選定作業を行った。

11月14日、15日「筑豊の子供を守る会」の創設者船戸良隆氏宅（山梨県大月市）を細井、鬼塚、山本が訪問し、「守る会」創立期の関係資料や福吉炭住での活動記録を収集した。

12月、収録資料の第2次選定作業を行い、12月28日に研究会を開催して最終的な収録資料と編集方針を決めた。

本資料集成は、最終的に全8巻、A4判、総ページ3,000ページ余、収録資料数240点となった。全体を編年順ではなく、以下大きく6項目に分け編集することを決定した。①筑豊の子供を守る会、②福吉炭住での活動、③鞍手地区での活動、④筑豊協力伝道奉仕会、⑤炭鉱犠牲者復権の塔、⑥県福祉事務所、の6項目である。

解説は細井が「本資料集成の概要について」を執筆し、鬼塚が「筑豊の子供を守る会の具体的活動について」執筆することにした。資料として「活動地一覧」を示すことにし、その確認を3月末黒宏一氏の来学によって行うことができた。

こうした研究成果の報告として、令和4年2月18日、公開講座「紙芝居を通じて見る筑豊の歴史」で細井が報告した。このとき川崎町の紙芝居師大西広幸氏に「筑豊一代」の紙芝居を上演していただき、服部団次郎による炭鉱犠牲者復権の塔について紹介することができた。3月14日には奨励研究の成果発表会（於附属研究所）で細井が報告した。

パンフレットの作成（4月完成）に向け、岩田正美氏、大友信勝氏、木原活信氏の3名に推薦文を依頼することができた。本資料集成発刊の意義が、貧困研究や生活保護史研究の第一人者に高く評価されることになった。

## **(2)「筑豊の子供を守る会」の活動記録が50年ぶりに蘇ることの意味、証言集としての意義**

「筑豊の子供を守る会」の活動に参加した学生達は日常とは異なる筑豊の炭鉱閉山が意味する過酷な現実を知ることになり、衝撃を受けた。そこで、地域住民とともに地域変革を目指すようになり、資本主義そのものの矛盾を解明していこうとして試行錯誤していった。そこから、牧師として成長していった一群の人々があり、筑豊に定着していった一群の人々がいた。この活動に参加した学生達にとって、「筑豊の子供を守る会」に参加したときの衝撃は大きく、その後の人生に大きな影響を与えたのである。しかし、その記録は今どこにもまとまった形で残っていない。黒沼宏一氏は第4代委員長として中央委員会を新たに設置しその委員長になっている。おそらく、このとき、約10大学（立教大学、東京神学大学、東京女子大学、国際基督教大学、明治学院大学、青山学院大学、同志社大学、関西学院大学、九州大学、熊本大学等）の活動チームの記録、冊子等を収集したものと思われる。その結果、大学ごとの活動チームの記録の多くが、本資料集成に盛り込まれることになった。これは関係者にとっては奇跡的なことであろう。関係者が自らの学生時代の記録に接する機会を今回提供できることは一つの研究成果であると思う。

筑豊がかつて日本有数の産炭地であったこと、そこに過酷な労働があり、炭坑夫への差別があったこと、そして、政府のエネルギー政策の転換によって筑豊が巨大な失業地帯に変貌したときの記憶は今や忘れられようとしている。今、筑豊は、石炭産業遺産という側面では紹介されても、そこで体験された怒りや苦悩、衝撃と戸惑いは追体験されることはない。本資料集成は生きた苦悩の証言の塊である。今、筑豊の歴史を知らない、知るすべを失った世代に向け、本資料集成は生々しい証言集としての意味を持つことになると思う。合理主義と経済効率ばかりを優先させてきた社会の限界が明らかになっている現在、本資料集成は新たな意味をもつのではないだろうか。

## **(3)本資料集成が有する種々な関連領域への学術的な貢献**

本資料集成は、貧困史研究、生活保護史研究、社会事業史研究、筑豊を中心とした産炭地研究等の分野において学術的な貢献が期待できよう。また、「守る会」の分裂と解散の経緯にかかわる会議録等は、1969年からの全共闘運動や日本キリスト教団の紛争史の前史的な意味を持つという見方も可能と考えている。戦後政治史の重要な局面が1960～1970年代の筑豊に凝縮されているとも言え

よう。したがって本資料集成は戦後政治史研究においても重要な素材を提供するという意義がある  
と考える。

#### **(4) 社会教育という観点から**

ヨーロッパ諸国において社会福祉は広い意味での教育（ソーシャルペダゴジー）として理解され  
ている。ソーシャルペダゴジーとは社会を場とする教育であり、民主主義のための集団を活用して  
の教育である。日本では、児童福祉と社会教育が分離されていて、学童保育はあっても若者ないし  
青年のための社会教育の場があまりに貧しいという現状がある。学生＝若者が子ども達とかかわり  
、学習指導をし、共に遊ぶということは学生＝若者自身にとって自己理解を深める大きな学びの場  
となる。一方、子ども達にとって、遠方から訪れ、自分たちの事を真摯に受けとめてくれる学生＝  
若者がいる、ということは一つの驚きの体験であり、学生＝若者との出会いは、他者のことを考え  
るという生き方のモデルを見出すことであって、その意義は大きい。「守る会」の活動に参加した  
学生達は、キリスト教的な奉仕活動では問題解決にはならないと焦燥感を深めていき、活動は分裂  
、解体していくのであったが、その活動の社会教育的意義は改めて再評価されるべきではないだろ  
うか。本資料集成刊行の意義は、こうした観点からもあると考える。

#### **5. 主な発表論文等**

細井勇「解説1：本資料集成の概要について」『「筑豊の子供を守る会」関係資料集成』第1巻、  
六花出版、2022年6月刊行予定)

鬼塚香「解説2：各大学チームの具体的活動について」『「筑豊の子供を守る会」関係資料集  
成』第1巻、六花出版、2022年6月刊行予定)

#### **6. その他の研究費の獲得**

無し